

# 「此身一つ」のゆくえ —樋口一葉「十三夜」における身分と身体—

平井 裕香

## 要旨

本稿は、樋口一葉の「十三夜」（1895年12月）を、明治20年代の日本という文脈及び語りの機能に注目して分析する。主人公であるお関の「此身一つ」は、家父長的家制度と資本制の下で、「斎藤の娘」、「原田の妻」、「太郎の母」、「亥之助の姉」という身分に分裂し、身分に応じて労働する身体として疎外されている。《上》におけるお関と「両親」の対話は、このような身体性をお関に自覚させる。また《下》におけるお関と録之助の出会いと別れは、「母」或は「乳母」と「車夫」として「家」の内外に分断された二人が、「おもふ事」を伝え合うことの困難さを明らかにする。しかし語りは、「今宵」のお関に寄り添い続けた「月」の位置をとることにより、掻き消えたはずのお関の「厭や」を録之助のそれと響き合わせ、お関の「此身一つ」を読み手の想像力の中に生かし続ける。「月」に仮託した書き手の視線はまた、それが照らし出す「世」全体にまで及び、「憂き世」を生きる「人」の群の背後にも、「此身一つ」の分裂と疎外の物語を思い描かせる。「十三夜」という小説は、個別の物語と社会の構造とをこのように交差させることによって、抒情性と批判性の双方を獲得している。

**キーワード：**「十三夜」、明治20年代、家制度、資本制、語り

## 1. 掻き消える「厭や」<sup>1</sup>

樋口一葉の「十三夜」は、1895（明治28）年12月、「文芸倶楽部」の臨時増刊「閨秀小説」号に掲載された<sup>2</sup>。作品の冒頭には、物語の主題をなす主人公の「身」の構造<sup>3</sup>と、それを読むことを読み手に促す語りの構造の双方が、端的に顕れている。

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと両親に出迎はれつる物を、今宵は辻より飛のりの車さへ歸して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの高声、いはゞ私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の欲さへ渴かねば此上に望みもなし、やれ／＼有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母親、あゝ何も御存じなしに

彼のやうに喜んでお出遊ばす物を、何の顔さげて離縁状もらふて下されと言はれた物か、叱かれるは必定、太郎と言ふ子もある身にて置いて駆け出して来るまでには種々思案もし尽しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせます事つらや、寧ろ話さずに戻ろうか、戻れば太郎の母と言はれて何時／＼までも原田の奥様、御両親に奏任の聲がある身と自慢させ、私さへ身を節儉れば時たまはお口に合ふ物お小遣ひも差あげられるに、思ふまゝを通して離縁となれば太郎には継母の憂き目を見せ、御両親には今までの自慢の鼻にはかに低くさせまして、人の思はく、弟の行末、あゝ此身一つの心から出世の真も止めずはならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、彼の鬼の、鬼の良人のもとへ、ゑゝ厭や厭やと身をふるはす途端、よろ／＼として思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の声、道ゆく悪太郎の悪戯とまがへてなるべし。(275-6 頁)

「例」の「両親」の声を通じて物語世界に現象した「娘」は、「悄然と格子戸の外に立」った「今宵」もまた、「家内」から漏れ聞える「父親が相かはらずの高声」に迎えられる。「分外の欲さへ渴かねば此上に望みもなし」と「母親」に語りかけるこの声は、「娘」に自らの「身」の「分」、すなわち身分を意識させずにはおかない。「原田の奥様」という身分を捨てれば、「太郎の母」という身分もまた失い、同時に「御両親」の「自慢」を「にはかに低くさせ」るうえ「弟」の「出世の真も止め」ねばならない、つまり「娘」・「姉」という身分も揺らぐ。輻輳する身分は、「離縁状もらふて下され」という「思案」の末の懇願の言葉を押し潰す。だが「戻らう」とすればするほど、この言葉の出所であった「此身一つの心」、「鬼のやうな我良人」への嫌悪感が高まる。「一つ」と複数の間で引き裂かれた「娘」の「身」は、「ふる」えて「例」ならぬ「音」を生じる。

「両親」が予期しているのは「例」の「車」の「音」であり、思い描いているのは「有難い」限りの「柔順しい子供」だ。「離縁」への願いを抱いて訪れた「今宵」の「娘」の姿をこれと対比することができるのは、書き手と、語りに媒介されて作中人物の発話と内言、及び情景を行き来する読み手だけである。お関に焦点化した語りに突如介入する、「何も御存じない」「父親」の「誰れだ」という問いかけは、「今宵」と「例」の隔たりを読み手に強く印象づけるだろう。「厭や」という声なき叫びを表出する「今宵」このとき、その「身」は「娘」という身分を剥落させて「道ゆく悪太郎」のそれになる。「家内」という場と「例」という時間は、「厭や」さを表現することを不可能にする。「厭や」という叫びを潜在させたお関の「身」は、他者の言葉によって、またそれへの応答を通じて、すなわち他者との関係において分裂し沈黙していく。このような「身」の有様を読み手に提示するのが、「十三夜」の語りの機能である。

「身」という言葉は、長きにわたって「十三夜」研究の焦点の一つであった。「十三夜」

に「分」「身分」という類のことばが頻出する」ことを指摘し、作中人物を支配している身分意識への注目を促したのは前田愛である<sup>4</sup>。この身分意識が作中人物相互の会話において顕れ、強化され、時に揺らぐさまを、紅野謙介らによる「注釈」作業は発言一つ一つに及ぶ詳細な分析を通じて明らかにした<sup>5</sup>。関礼子は、お関の「身」の構造を解きほぐしてみせたこの試みを、「前田によって『〈憂世〉のなかに溶かしこ』まれてしまった観のある「お関のとらわれた心」を、「身ひとつ」の視点から掬い上げることにほかならない」と評価する<sup>6</sup>。この評価が含意するのは、お関の「身」の構造を、お関の「翻意」の解釈という「十三夜」論のもう一方の流れに接続することの有効性である。

お関の「翻意」の理由を「母性」の指摘とヒロインによるその再自覚に代えて「嫁入せぬ昔し」という“過去”への回帰の不可能性に対する絶望的な認識に求めた高田知波の論<sup>8</sup>は、「父親」の説得とお関の返答とが直接的に対応する数箇所に収斂していた解釈を、《上》を構成するお関と「父親」と「母親」の対話全体へと開いた点で、大きな意義を持った。しかし高田は、「十三夜」冒頭のお関の内言に、息子である太郎に「継母の憂き目を見せ」ることの辛さのみならず、「ご両親」への気兼ね及び「弟の行末」、すなわち「長男の出世による家名の回復」という「お関の婚姻を軸とする新しい現実」<sup>9</sup>への認識が既に示されていることを軽視しているように思われる。「父親」が述べ立てる論理はお関によって全て先取りされているという山本欣司<sup>10</sup>、出原隆俊<sup>11</sup>、北川秋雄<sup>12</sup>らの批判は、この意味において正しい。お関の「身」が他者との関係において規定されているということは、「十三夜」という小説の前提であって、「十三夜」論の結論にはならない。お関はお関という一人の個人である前に「斎藤の娘」、「原田の妻」、「太郎の母」、そして「玄之助の姉」なのだ——「お関」という固有名すらも、「お父様」からの呼びかけとして導入されている。

しかしなお、「十三夜」の《上》を「耐えることだけが自己目的化していくような空しい生のドラマ」<sup>13</sup>や、「家族共同体のなかで形造られた自己犠牲という神話」<sup>14</sup>に回収することはできない。なぜならそれらは、「娘」、「妻」、「母」そして「姉」という家父長的家制度の下での身分として疎外されることに抵抗するお関の「此身一つ」、「家内」においては掻き消えていく、しかし読み手に確かに読まれた「厭や」という叫びを取り零しているからだ。お関の「厭や」を録之助の「厭や」と響き合わせる余地を持たないこの枠組みでは、《上》と《下》に切断や対照性を見出すことはできても、有機的な繋がりを読むことは難しい<sup>15</sup>。したがって本稿は、《上》の末尾でお関に再び「格子戸くゞ」らせる力を、「父親」の諫めにもお関の訴えにも限定することなく、「母親」と原田のそれらを含めた声の錯綜に求めつつ、この錯綜におけるお関の「身」の顕れを検討する。《上》において焙り出されるお関の「身」のありようと、《下》に示される録之助のそれとの距離を、両者を繋ぐ語り的手法に注目しつつ測定することによって、「十三夜」が抒情性と批判性の双方を実現し得た所以を明らかにしたい<sup>16</sup>。それは「月」の小説という前田以

来の「十三夜」評価を、語りの観点から再検討する試みでもあるだろう<sup>17</sup>。

## 2. 「家内」における身分、「家」の地位

「十三夜」が世に問われた 1895（明治 28）年、大日本帝国では各人の「身」が身分に応じた権利義務関係の中に法的に位置づけられつつあった。個人間の契約としての婚姻を基調とした家族法を有する旧民法（ボアソナード法）は、伝統的・慣習的な家制度を擁護する立場の反対にあって、1892（明治 25）年に施行延期が決定される。この後、家制度を温存する形での根本的修正を経て、1898（明治 31）年に施行された明治民法典は、親族及び相続、とりわけ女性の地位に関して、極めて保守的な規定を設けるものであった。あたかも禁治産者のように財産の管理・相続権を奪われ、経済的契約の場から排除された女性は、専ら「家」の内部での再生産労働に従事することになる<sup>18</sup>。女性は「母」、「母」になるべき「妻」、或は「妻」になるべき「娘」として、家長たる「父」、「夫」、或は「子」の戸主権に従属することが定められた。他方で家長には、婚姻や養子縁組に関する同意権、すなわち「家」の成員を決定する権限とともに、それを扶養する義務が与えられた。「家」の興亡は家長の責任、家長の経済的・社会的・政治的上昇すなわち立身出世の如何次第となり、女性はそのための資本となる。日清戦争後の資本蓄積を背景として到来した「金の世」<sup>19</sup>において再編成されていく「家」同士の力関係に応じて、女性は結婚の「自由市場」<sup>20</sup>を流通することを強いられたのだ。

お関の「身」は、これら「家内」における身分——「娘（姉）」、「妻」、「母」——と、地位を異にする二つの「家」——没落氏族たる斎藤〔主計〕と奏任官たる原田〔勇〕<sup>21</sup>——の交点にあって、「斎藤の娘」、「原田の妻」、「太郎の母」、そして「亥之助の姉」に分裂している。《上》に示されるお関と「両親」の対話は、身分のこのような輻輳性ゆえに生じる、話し手と聴き手の意識のずれや変容によって方向づけられている<sup>22</sup>。例えば「〔斎藤の〕娘」を歓待する「父親」の言葉は、「車」と「女中」、汚れた「畳」に不釣り合いな「着物」、そして「お宅」＝原田家への言及を含むがゆえに、「〔原田の〕奥さま扱ひ」として受け取られる。「弟」の亥之助を気遣う「〔斎藤の〕娘」の問いかけは、「母親」の応答の中で「夜学」、「昇給」といった立身出世に関する語彙を介して「原田さんの縁引」へと結ばれ、「何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み申て置てお呉れ」という「〔原田の〕妻」への頼みとして返される。「奥様気を取すて、今夜は昔しのお関になつて」という「母親」の勧めは、お関の「出世」と「実家」の没落の対照へと横滑りし、原田と斎藤の「身分」の差を強調する言葉として聴かれてしまう。また、自らの「親不孝」を省みるところから「父さんや母さん」の「お傍で暮した」という願いを仄めかす「娘」の言葉を、「家に居る時は斎藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか」と一蹴するとき、「父親」は「勇さんの気に入る様にして家の内を納めることこそが、「〔斎藤の〕娘」がなすべき「実家の親の貢」であることを示唆している

のだ。「娘（姉）」或は「親」としての、また「娘」或は「親」への情愛の表現は、斎藤と原田という二つの「家」の間の力関係に否応なく巻き込まれ、より高い地位にある原田家へと、つまり「原田の妻」・「太郎の母」という身分へと、お関を追い詰めていく<sup>23</sup>。

したがって、置いて出ねばならない太郎への情愛の強さに比例するものとして「決心の臍」の固さを主張し、「御父様、御母様」という呼びかけで語り始めて語り終えるというお関の論法は、親子の情愛を喚起する「戦略」<sup>24</sup>としてのみならず、以上のような対話の流れによって強いられるものとしても読まれるべきであろう。そしてこの論法それ自体が「離縁の状を取つて下され」という懇願を封殺していくこともまた、ここに至るまでの流れの通りなのである。「もう／＼もう私は良人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔しと思へば夫れまで」、すなわち「原田の妻」・「太郎の母」という身分を捨てて「斎藤の娘」に戻りたいというお関の主張は、「父親」によって「斎藤の娘」であるからこそ「原田の妻」・「太郎の母」でなければならないという説得へと反転させられる。「斎藤の娘」は「親の為弟の為」、つまり斎藤家の再興、未来の家長たる「弟」の立身出世に寄与するために、また斎藤家の安全弁、原田家の未来の家長たる「子」との接点として、「原田の妻で大泣きに泣」かねばならない。家長たる「父親」が説かざるを得なかったそれは、斎藤の「家内」における身分と斎藤という「家」の地位、二つの軸が交差するところにある「家」の論理なのだ<sup>25</sup>。

「弟」たる亥之助の不在を照らし出す語りは、この「家」の論理が個人を超越した構造であることを強調しているように思われる。高田や関が論じる通り、亥之助の存在、その「姉」たる身分は、お関の離縁を退ける重要なファクターである<sup>26</sup>。「家内」に一貫して不在であるにもかかわらず、お関と「両親」によって度々言及される「弟」は、空白の中心として《上》の物語を規定していると言えるだろう。また「〔亥之助の〕姉」というお関の身分は、作中人物によって明言されることも書き手によって明記されることもないまま、お関の生を決定づけるものとして、「両親」とお関、そして読み手に強く意識される。「お前が口に出さんとても親も察する弟も察する、涙は各自に分て泣かうぞ」と敢えて「弟」を主語に置く「父親」の言葉と、「父親」と「母親」及びお関それぞれの「涙」を描写しつつ「亥之が折て来」た「薄の穂」を情景の焦点として設定する語りとの対応は、この意味で非常に示唆的である。立身出世の物語は、主人公の不在においてなお、或は不在においてこそ機能する。現在の家長たる「父」の言葉は、そのまま未来の家長たる「弟」の言葉なのだ。「家」の論理の下、個々の「身」は固有性を抑圧され、交換可能となるということが、ここで読み手に示されている。さらにそのような「家内」の有様を、「くもらぬ月」に照らされる「夜」という時空間へと開くとともに、一括して「哀れ」と評価してみせる語りは、個人の時間を越えて流れる「家」の時間、またそれを包摂する「世」の時間の非情さを、読み手に印象づけている<sup>27</sup>。

### 3. 「母」と「乳母」のあいだ

家長によって体现される「家」の論理は、「恨み」を表出してしまうお関の「身一つ」を、「身がら」すなわち身分に応じた「世の勤め」で押し潰すとともに、「何事も胸に納め」ること、「不運」を身体に引き受けて沈黙することをお関に強いる。このようなお関の「身」のありようは、《上》冒頭において読み手に示された「此身一つ」の分裂と疎外という展開に、符合していると言えるだろう。だが冒頭とは逆方向に「格子戸くゞ」るとき、お関の意識、また読み手の意識は冒頭と同じではない。《上》を織り成す対話、とりわけお関によって代弁される原田勇の、すなわち原田家の言葉への斎藤家の応答は、資本制と家父長的家制度の下に置かれた女性の「身」の構造の、最も残酷な部分を明るみに出している。

「家」の論理の下、血縁に基づく情愛は「家」の興隆、すなわち現在及び未来の家長の立身出世に資するよう統制される。したがって「身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあればその様な火の中にじつとして居るには及ばぬこと」という「母親」の「娘」への同情も、「私の様な不運の母の手で育つより継母御なり御手かけなり気に適ふた人に育てゝ貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々あの子の為にも成ませう」というお関の「両親」及び自身への説得も、「断つても断てぬ子の可憐さ」ゆえの声の「ふるへ」という制御不可能な身体的反応すらも、「家」の論理、身分による「身一つ」の抑圧を逆説的に補強する。「太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ」と「父親」が言うとき、お関が「我身ながら我身の辛棒がわかりませぬ」と嘆いたその「辛棒」には、この統制された情愛、母性というイデオロギー<sup>28</sup>が代入される。

しかし、「父親」がお関の中に実体として指示したかに見える母性は、対話の中でその虚構性と構築性を露呈させている<sup>29</sup>。「斎藤の娘」という身分を「原田の妻」・「太郎の母」という身分と一致させようとする斎藤〔主計〕の論理と、それらの不一致を主張する原田〔勇〕の論理との間にはずれがあり、生みの母親であるお関は「母」とも「乳母」とも呼ばれ得る。このことは、「母」という身分、母性という「辛棒」が、「家」の論理に従って付与されもすれば剥奪されもするということを、聴き手であるお関、そして読み手に明かすだろう。お関の訴えの前提をなしていた「母」と「継母御なり御手かけなり」との区別は、そもそも意味をなさないのだ。

お関に「離縁」を求めさせたのは、「あの子（太郎：引用者註）が出来てから」「今宵」に至るまで浴びせられ続けた、原田勇の冷酷な仕打ちである。勇変貌のタイミングがお関の懐妊と出産いずれであったにせよ、その理由が「母親の教育力」の欠如であることは間違いないだろう<sup>30</sup>。そしてそれは、「召使の前にて散々と私（お関：引用者註）が身の不器用不作法を御並べなさ」り、「二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑みなさる」、また「表向き実家の悪いを風聴なされて、召使ひの碑女どもに顔の見られるや

うな事なさ」という勇の態度から察されるように、斎藤と原田の家格の差異の帰結なのだ。「斎藤の娘」は「太郎の母」という身分に釣り合わない——斎藤の側の供給と原田の側の需要は一致しない。「いはゞ太郎の乳母として置いて遣はす」という言葉は、関の議論によれば「勇の苦い失意の表れ」でしかないが、「家」の論理の酷薄さ、結婚の「自由市場」の非情さを如実に表してもいるのである。

「太郎の母」という身分の揺らぎは、安泰かに思われた「原田の妻」という身分をも、翻って危うくする。次世代の再生産が「母」の役目なら、「夫」の「機嫌の好い様にとゝのへて行くが妻の役」、「召物の揃へ」をはじめとする労働力の再生産が「妻」の役割である<sup>32</sup>。お関が「両親」に報告する、「家の内の楽しくないは妻が仕方が悪いから」、「呼、私位不仕合の人間はあるまい、御前のやうな妻を持つたのは」といった原田の発言は、「斎藤の娘」が「原田の妻」という身分にもまた不相応であることを語っている。これに対し「母親」は、「此方から強請た訳ではなけれど支度まで先方で調へて謂はゞ御前は恋女房」、「妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まんだら頼みによこして貰つて行つた嫁」と、「斎藤の娘」が「原田の妻」であることの正當性を主張することを以て反論する。そしてそれは、「親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい」原田の発言によって動揺させられた、「嫁の親」たる「私や父様」の身分、すなわち「彼方」＝原田と「此方」＝斎藤の、ひいては各々の家長たる「父様」と「勇さん」の対等性を回復する試みでもある。「母親」の憤りは、「身分が悪いの学校が何うしたのと宜くも宜くも勝手な事が言はれた物」と、あたかも身分を度外視するかのように語り出されながら、しかし「父親」の諫めや勇の不平と同じく、「家」と「市場」の論理の枠内に閉じ籠ったままなのである。

原田の側の論理においてお関が「乳母」であるとすれば、その身分は「華族女学校の椅子にかゝつて育つた」「御同僚の奥様がた」<sup>33</sup>よりむしろ「召使」や「婢女」に近いということになる。他方で斎藤の側の論理においては、「女中」や「婢女」、「妾」とお関との差異は、「原田の妻」・「太郎の母」という彼女の身分を担保するものとして、繰り返し確認されていた。「父親」は「娘」の「例」の「威勢よき」有様に似合わぬものとして「女中」の不在に言及し、お関は「婢女ども」が「母さん」を求めて愚図つく太郎を虚しくあやしつけている様を想像する。「母親」が「原田の妻と名告て通る」ことに付随する務めとして挙げるのは、「お位の宜い方々や御身分のある奥様がたとの御交際」とともに「女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り」である。とりわけ「第一は婢女どもの手前奥様の威光が削げて、末には御前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立てにも母様を馬鹿にする気になられたら何とします」という「母親」の原田への憤慨は、「奥様」・「母様」というお関の身分が、「婢女ども」との差異によって常に確認されるべきことを述べているが、差異によってのみ支えられる不安定なものであるということもまた、同時に明らかにしているのだ。「お関」の「身」は、「母」と「乳母」、或は「妾」、「婢女」、「召使」

という身分のあいだで揺らいでいる。

#### 4. 「[乳] 母」という労働

そのような揺らぎの中で展開されるお関と「両親」の対話は、「母」という身分が「乳母」という労働と置き換え可能であること、前者が後者に還元可能であることをお関に、また読み手に曝け出していく。綿々と続くお関の訴えは、「賃仕事し」て斎藤家で暮らすことと原田家に「乳母として置いて遣は」されること、或は「原田の妻と言はれ」「太郎の母で候と顔おし拭つて居る」こととの間に二者択一を形成する。これに応じた「父親」の諫めにあつては、前者すなわち「斎藤主計が娘に戻」ることが「水仕事」というより厳しい労働に置き換えられ、そのうえで後者すなわち「原田太郎が母とは呼ばるゝ事」が選択される。さらに、お関の語り出しをなしていた「内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人で置いて下さりませ」という切実な懇願は、「車」が呼ばれ、原田家に帰ることが決定付けられた後には、「関は立派な良人を持つたので弟の為にも好い片腕」という悲愴な諦念に転倒する。以上のような対話の展開が露呈させるのは、「乳母」も「母」も「賃仕事」や「内職」と同じく労働であること、「大丸鬘に金輪の根」や「黒縮緬の羽織」を対価とする前者は、「結び髪」と「綿銘仙の半天に襷がけ」の生活しか保証し得ない後者より有利な労働であること、そして後者を以てのみ「姉」たるお関が「弟」たる亥之助に「家」への貢献、すなわち「孝」の面で匹敵し得ること——言わば女性が置かれた経済的・社会的・政治的条件の劣悪さなのだ。

「父親」の諫めへのお関の返答には、「[乳] 母」という労働の苛酷さ<sup>34</sup>が表現されている。原田家で「[乳] 母」として働くこと、それは「死んだ氣」に、また「魂一つ」になること、「私の身体」を「勇のものだと思」つて「彼の人の思ふまゝに何となりして貰」うこと、つまり自己の身体をモノと化し、他者の使用に供することである。そして労働力たるこの身体こそが、半永久的に「辛棒」し沈黙し続ける身体、「家」と「市場」の論理が要求する「身」のありかたなのだ。身分に応じて「市場」を流通し、「家内」において消費される、物言わぬ身体。「今宵限り関はなくなつて」、「もう此様な事は御聞かせ申ませぬ」、「最う何も言ひませぬ」、「私の身体は今夜をはじめに勇のもの」といった表現が示す通り、お関は「今宵」初めてそのような身体性を獲得、或は自覚した。だからこそ、「此次には笑ふて参りますとて是非なさゝうに立あが」り、「涙をかくして」「車」に乗り移るのである。お関にとってのその「身」のありかたの変容は、「これまでの身と覚悟して」と読み手に向けてお関の姿を描出する語りによっても強調されている。《上》における声の錯綜から、「離婚決意過程において彼女（お関：引用者註）の視野が十分に捕捉していなかった新しい論理」<sup>35</sup>が浮かび上がってくるとすれば、それは身分と身体をめぐる以上の論理である<sup>36</sup>。

この論理はしかし、「今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ」という「父親」の言葉が

示しているように、また「今日までも物言はず辛棒して居りました」というお関自身の言葉が含意するように、お関の生を既に常に規定していた。かつて「妻」として斎藤家に売られ、原田家を買われたお関の身体<sup>37</sup>は、「母」としての供給と「乳母」としての需要のずれゆえに、「今宵」再び斎藤家と原田家の間を彷徨う。結婚という「市場」を流通し「家内」において消費されるという点ではいずれの場合も同じであり、単に「形」から「教育」へと価値の基準が変わったに過ぎない。価値の基準を決定するのは、売り手たる斎藤〔主計〕ではなく、まして商品たるお関でもなく、当然ながら買い手たる原田〔勇〕であるが、その決定が明治20年代の日本という歴史的な文脈を反映しているということもまた、指摘しておくべきだろう。笹尾佳代が、「美人妻」と「賢母」をめぐる同時代状況を検討しつつ論じた通り、《上》におけるお関と「両親」の対話が焙り出すのは「流動する価値の指標に翻弄されるお関の姿」なのだ<sup>38</sup>。

そして、翻弄されるのはお関のみではない。「両親」も亥之助も原田勇も、斎藤の「聲」に選ばれなかった録之助も、そして後述する通り「憂き世」を生きる「人」々全てが、「家」と「市場」の論理に弄ばれている。したがって《下》におけるお関と録之助の邂逅は、「夢の様な恋」の回帰という抒情の源であるのみならず、「家」と「市場」への透徹した批判の契機でもある。自身の「身」の構造を、これまでになく深い絶望の中で見据えることを迫られた「今宵」のお関にのみ可能であった録之助との出会い、家父長的家制度と資本制が要請する、分裂し疎外された身体性を認識した読み手だけが読むことのできる「男」と「女」の交わりが、《下》には描かれている<sup>39</sup>。このように考えることは、《下》、とりわけ録之助の「脱実」した姿に向けられた同時代の評価に応答すべく、《上》と《下》の「物語の質的差異」に注目する笹尾の論<sup>40</sup>から多大な示唆を受けつつも、《上》と《下》の連続性の意義をこそ強調し、読み手の想像力の中にお関と録之助の「身」の交錯を実現する語りに「十三夜」という小説の力を求めることに外ならない。疎外された労働力として二つの「家」の狭間に再び放り出されたお関の身体に焦点を当てるとき、《下》から読み取られるのは「コミュニケーションの不可能性」<sup>41</sup>だけではないだろう。《上》冒頭でお関の「身」から零れ落ちた「厭や」という声なき声が、録之助の「厭や」との交わりを通じて「十三夜」全体に響き渡る瞬間に、読み手は立ち会うのである。

## 5. 「乳母」の身体、「車夫」の身体

お関と録之助の邂逅を読み解く前に、関礼子が録之助及び《下》の舞台のそれぞれに与えた「家庭破壊者」及び「反家族的空間」という位置づけ<sup>42</sup>を、「家」と「市場」という制度の観点から説明し直す必要があるだろう。録之助は、元は「小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋の一人息子」、「父親の居」なくなつてからは高坂家の家長であった。しかしお関との再会の三年前、「遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み尽して、家も稼

業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つた」、すなわち家長としての義務を放棄した。

「お袋は田舎へ嫁入つた姉の処に引取つて貰ひ」、「女房は子をつけて実家へ戻したまゝ音信不通」、「女の子」である「其子も昨年の暮チプスに懸つて死んだ」という。録之助が高坂の「家内」における「子」、「夫」、「父」という身分を捨て去ると同時に、録之助の「お袋」、「女房」、「子」もまた「母」、「妻」という身分、或は生命さえも喪失してしまった。そもそも家長たるべき録之助が「浅草町の安宿、村田といふが二階に転がつ」ている今、高坂という「家」そのものが既になく。録之助の「放蕩」は、「家族」や「家庭」という共同体を破壊すると同時に、「家」という国家の構成単位を一つ、雲散霧消させた。録之助は家父長の家制度からの脱落者であり、かつその攪乱者である。「金を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか」と自嘲して憚らない録之助はまた、資本制からの脱落者・攪乱者でもある。

以上の録之助の「身の上」は、《上》で描かれるお関のその陰面をなすがゆえに、家制度と資本制の下での「身」の構造を、より多層的かつ多角的に読み手に明かす<sup>43</sup>。お関が「斎藤の娘」・「亥之助の姉」であるからこそ「原田の妻」・「太郎の〔乳〕母」であることを受け容れざるを得なかったのとは対照的に、録之助は「家内」における全ての身分から一挙に脱落し、高坂家そのものを破壊した。さらに録之助の「お袋」と「女房」と「子」が辿った運命は、亥之助或は勇の立身出世が失敗した場合のお関と「母」、そして幼い太郎の行末を暗示するとともに、お関が「亥之助の姉」かつ「原田の妻」であり続けることの価値を明らかにする。亥之助にとっては原田にあたる「姉」の嫁ぎ先が録之助の「母」を、また勇にとっては斎藤にあたる「妻」の実家が録之助の「妻」及び「子」を引き受けた。「姉（娘）」及び「妻」は、「家」の興亡を背負って「市場」へと引き出される家長にとって、欠くことのできないセーフティネットなのだ。録之助とお関、また死んだ「女の子」と「夢」見る太郎の生は、同じく「家」と「市場」の論理に、しかし相異なる形に規定される「男」と「女」のそれとして、対比されていると言えるだろう<sup>44</sup>。

したがって、「上野の新坂下、駿河台への路」は、かつて想い合ったらしい者同士の偶然の再会に相応しい舞台としてのみならず<sup>45</sup>、「家」の内外に分断された「男」と「女」の生が交差する特別な時空間としてある。それは「家内」における身分を放棄すると同時に「家」そのものを崩壊させた録之助の身体が、「車夫」という最下層の労働力として流通し、消費される「市場」であるとともに<sup>46</sup>、「母」或は「乳母」としての労働に従事すべきお関の身体が、ある「家内」から別の「家内」へと受け渡される無慈悲な経路であり<sup>47</sup>、「悪者」の暴行に遭いかねない危険な場所でもある<sup>48</sup>。「家」の枠に囲い込まれてはいないものの、その外部としてあるという意味でやはり「家」に規定されているこの空間を、関に倣って「優しい」、「自由な」と形容することには躊躇いがあるが、それが「両義的な」、或は多義的な場所であることは疑い得ない。作中人物の内言から離れて、「さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえ／＼」に物がなほ上野へ入りてよりまだ

一町もやう／＼」という情景描写から《下》を書き起す語りは、その舞台に折り重なる以上の意味を一つに収斂させることなく、読み手の想像力を多方向に開いている。

「車夫」と「客」として始まる二人の関係を、そこから逸脱させていくのが「厭や」という録之助の声である。それは《上》冒頭のお関の「厭や」と同様に話し手を、またここでは聴き手をも、身分から一時遊離させる。「増しは上げやうほどに骨を折つてお呉れ」、「代はやるほどに何処か开処らまで」と、「客」の「奥様」という身分に従って「車夫」に要求していたお関も、「悪者らしくもなく提燈を持か」えたその「車夫の顔」を眺めやらずにはいられない。こうして、「知らぬ他人の車夫さん」がお関の記憶の中の「誰れやら」と重なり、二人の間に「私」と「貴嬢／貴君」の対等な関係が、一面ではあれ結ばれていく。

この関係の中で、「父」によっては「家に居る時は斎藤の娘、嫁入つては原田の奥方」に、「夫」によっては「あの子が出来てから」とそれ以前に、分断されつつ「[乳]母」という身分に収斂させられていたお関の生が、拡がりと繋がりを回復する。結果としてお関が認識を迫られる、また読み手が確認を求められるのは、身分と身体をめぐる「家」と「市場」の論理がお関の生を既に常に規定していたということ——「娘」も「妻」も「[乳]母」と同じく労働であって、お関の身体は既に常に資本であったということである。お関が「今の原田へ嫁入」ったのは、「親々の言ふ事」に「異存を入られ」なかったから、つまりお関が斎藤という「家」、或は斎藤主計という家長に使役される労働力であったからである。「先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら」という箇所は、結婚という「市場」における主客の、「家内」における身分と「家」の地位に基づく不均衡を反映している。また「烟草〔屋〕の録さん」ではなく「奏任」である原田に「娘」を嫁がせる家長の選択には、当然ながら高坂と原田と斎藤、三つの「家」の力関係が働いている。お関の回想は、「夢の様な恋」の甘美な物語としてのみならず、「世」と「家」の時間に包摂された「女」の時間<sup>9</sup>として、読み手に提示されていると言えよう。

「思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙がこぼれて忘れかねた人」というお関の内言には、「家」と「市場」の論理の下に置かれた「女」の身体性が刻み込まれている。斎藤から原田へと流通するにあたって、強いて「定め」るべき「心」以前の悲しみを「涙」で表現するとともに、録之助の記憶を留めようとしたお関の「身」は、しかし結局それらを放棄し「原田の妻」となった。お関の「身」は「娘」、「妻」、「母」という身分に分裂し、身分に応じて労働する身体として疎外されたのである。しかし「今宵」記憶は呼び戻され、「あゝ宜く私を高坂の録之助と覚えて居て下さりました、辱なう御座ります」という録之助の言葉に、お関は「さめ／＼」と「する」。「誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな」という言葉が、お関の内言に留められたか、録之助に向けて発されたかを、語りは敢えて明らかにしない。その声は「涙」を流すお関の「身」とともに、読み手にこ

そ引き受けられるべきものとして、書き記されているのだろう。

## 6. 響き合う「厭や」

「我が此様な丸鬘などに、取済したる様な姿」、すなわち「原田の妻」という身分を纏った自らの身体を慮りつつも、「夢さらさうした楽しらしい身ではなけれども」と録之助を見遣ったお関は、しかし自らの「身の上」を語ることはなかった。「お関」に「憂」を表現することを躊躇させた、録之助の沈黙と「茫然とせし顔つき」。それをもたらしたのは、「車夫」たる録之助に「客」の「奥様」として応対しようとしたお関の振舞いであろう。「考へれば何も彼も悉皆厭やで、お客様を乗せやうが空車の時だらうが嫌やとなると用捨なく嫌やに成まする、呆れはてる我まゝ男、愛想が尽きるでは有りませぬか」という沈黙する直前の録之助の言葉は、「此处まで挽いて来て厭やに成つたでは済むまいがね」、「お前は我まゝの車夫さんだね」といった《下》冒頭におけるお関の言葉に対応している。「厭や」という叫びを「我まゝ」として一蹴し、そのような叫びを抱え込んだ「此身一つ」を分裂させ疎外する、「家」と「市場」の論理。《上》において、また「今宵」に至るまで常に、自らに沈黙を強いてきたそれを、お関はここで自ら行使してしまっている。お関は録之助の「厭や」に応答することができなかった。結果として二人の会話には、「家」と「市場」の論理がまわり続けることになる<sup>50</sup>。二人の「身」は、身分に分裂し、身分に応じて労働する身体として疎外されたままであり続ける。そのようなとき言葉は、話し手と聴き手双方の「此身一つ」を抑圧するものでしかない<sup>51</sup>。ゆえに「我身のほどをも忘れて問ひかけ」たにもかかわらず、お関は録之助が「何を思ふか」を読み取ることも、「我身のほどをも忘れて」語り始めることもできなかったのだ。お関と録之助の対話は、こうして閉塞していく。

しかしながら、《下》の末尾、お関と録之助の別れの場面においては、労働する二つの身体の背後に、疎外を拒む「身」が揺曳しているように思われる。

広小路を出れば車もあり、阿関は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失礼なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何か申たい事は沢山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私は御別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬ様に、伯母さんをも早く安心させておあげなさりまし、蔭ながら私も祈ります、何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります処を見せて下され、左様ならばと挨拶すれば録之助は紙づゝみを頂いて、お辞儀申す筈なれど貴嬢のお手より下されたのなれば、あり難く頂戴して思ひ出にします、お別れ申すが惜しいと言つても是れが夢ならば仕方のない事、さ、お出なされ、私も帰ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月の

かげに靡いて力なささうの塗り下駄のおと、村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。(298 頁)

お関が録之助に差し出す、「小菊の紙にしほらしく包」んだ「紙幣」には、「何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります処を見せて下され」という、高坂家再興への願いが込められている。それは「からだを厭ふ」、すなわち労働力としての身体の再生産のために使用されるべきものであった。しかし「あり難く頂戴して思ひ出にします」という言葉とともに録之助に受け取られるとき、「紙幣」は使用への道筋を断たれている。「家」の再興、立身出世という物語が失効するとともに、金銭が「市場」における流通を塞ぎ止められるこのとき、「口へ出ませぬ」「申たい事」が読み手に向かって迫り出してくる。語られることのなかったお関の「身の上」、また声をとることのなかったお関の「厭や」が、この場面を読む行為の最中で、録之助のそれらと交錯する。ずれを孕んだ受け渡しによって、お関と録之助のあいだに生まれ得たのは、「家」と「市場」の論理に押し潰されていた言葉であると言えるだろう。

お関と録之助のやり取りは、笹尾が結論づけた通り、「二人の思いの上では成立した」、しかし同時に「かつて思いを寄せあった二人の隔たりを決定的なものとするという、断絶を含み込んで機能した」、両義的なコミュニケーション<sup>52</sup>——「家」と「市場」の論理を空転させる可能性を孕みながら、それらへと回収されていくコミュニケーションであった。録之助が後ろを向いた途端、コミュニケーションの場から一気にフェードアウトし、お関と録之助の道行きを「其人」と「此人」のそれとして俯瞰的かつ対照的に捉える語りは、「家」と「市場」の論理が支配する「憂き世」に二人をばらばらに溶かし込んでいる<sup>53</sup>。二人は労働する二つの身体として、「村田の二階」と「原田の奥」、すなわち「家」の外部と内部に分断される。しかしながら書き手は、各々が同じく抱え続ける「憂き」と「おもふ事」に、読み手の想像力を方向付けてもいる。「私は何も思ふ事は御座んせぬ」という《上》末尾でのお関の言葉、そこで獲得された身体性は、ここにおいて相対化される。また「憂き」という言葉が引き寄せる、「誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな」というお関の声は、お関と録之助の、物語世界内においては実現されなかった対話の可能性に、読み手の想像力を繋ぎ止める。身分に応じて労働する身体は、「男」のそれも「女」のそれも、分裂と疎外に抵抗する「此身一つ」、「厭や」という声なき叫びを引き摺り続けているのだ。

お関の「厭や」を呼び戻し、「録之助」の「厭や」と響き合わせるという語りの機能は、「月」のモチーフに形象化されている。斎藤の「家内」に差す「お月様」、「涙」と「薄」を照らす「くらぬ月」、お関と録之助の邂逅を映し出す「さやけき月」、そして別れた二人の道行きを鳥瞰する「月」——「今宵」の始まりから終りまで、「月」はお関に寄り添っていた。書き手と読み手が密やかに共有した、冒頭の「ゑゝ厭や厭やと身をふる

はす」お関の姿が、こうして小説全体を貫く。「月」に準う語りはまた、そのようなお関の物語を「世」全体へと開いてもいる。「家」と「市場」の論理によって「お互ひの世」に分断された全ての作中人物、そして名もなき「人」の群。彼〔女〕らの背後にもまた「厭や」という叫びを孕んだ「此身一つ」、その分裂と疎外の物語を透視し得る位置に、読み手は導かれる。「十三夜」の「月」は、お関の生という時間的拮がりとともに、「憂き世」という空間的拮がりをも照らし出す。お関の「厭や」は、録之助のそれのみならず、「憂き世」に散らばる「人」々のそれと響き合うのである。

「十三夜」という小説は、個別の物語と社会の構造とを交差させることにより、抒情性と批判性の双方を発揮している。そしてこの交差は、主人公への焦点化と「月」の如き俯瞰とを巧みに往還する語りによって、実現されている。「十三夜」を読む行為を通じて読み手が感得するのは、家制度と資本制への透徹した洞察であるとともに、お関の「此身一つ」が「十三夜」以後も生き続ける一縷の希望であろう。遠ざかっていくお関の「塗り下駄のおと」に傾ける耳を、読み手は手に入れるのだ。

## 註

- <sup>1</sup> 田中優子『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』(集英社新書、2004年7月)は、「厭や」という叫びを起点に樋口一葉の文学を論じており、本稿はこれに示唆を受けた。
- <sup>2</sup> 本文からの引用は菅聡子・関礼子校注『新日本古典文学大系 24 樋口一葉集』(岩波書店、2001年10月)に依拠し、ルビは省略した。傍点による強調は全て引用者による。
- <sup>3</sup> 「身」という言葉を取扱うに際しては、市川浩『〈身〉の構造——身体論を超えて』(講談社：講談社学術文庫、1993年4月)を参考にした。
- <sup>4</sup> 前田愛「十三夜の月」『樋口一葉の世界』平凡社、1978年12月〔原題「十三夜」〕「国文学」1968年4月〕、引用は236頁。
- <sup>5</sup> 紅野謙介・小森陽一・十川信介・山本芳明「樋口一葉「十三夜」を読む(上・下)」『文学』1990年冬・春。
- <sup>6</sup> 関礼子「都市の森の時間——『十三夜』『語る女たちの時代——一葉と明治女性表現』新曜社、1997年4月〔「文学」1993年夏〕、引用は320頁。
- <sup>7</sup> 笹川洋子はこれを、「父の言葉から(家の論理)の重要性にお関が気づき、反省し、改心したという説」、「父の言葉を聞いて、お関が斎藤家には自分の居場所がないと諦めたという説」、「父の冷徹な論理によって、お関は死を覚悟させられたという論」の三つに大別した(「『十三夜』試論——ジェンダーと言語行為をめぐる」『樋口一葉——物語論・言語行為論・ジェンダー』春風社、2013年3月、273頁)。お関の身分と身体に注目するとき、これら三つが止揚されることを、本稿は主張する。なお、解釈の如何とともに「翻意」という言葉の適否も当然争点となってきたことを、併せて補足しておきたい。
- <sup>8</sup> 高田知波「幻滅する「嫁入りせぬ昔し」——『十三夜』ノート」『樋口一葉論への射程』双文

社出版、1997年11月[「近代文学研究」1984年10月]、引用は48, 50頁。

- 9 同上、54, 52頁。
- 10 山本欣司「『十三夜』論——お関の「今宵」／斎藤家の「今宵」」「国語と国文学」1984年8月。
- 11 出原隆俊「『十三夜』を統合するもの——《擦れ》の機能」「国文学 解釈と鑑賞」1995年6月。
- 12 北川秋雄「『十三夜』論——娘・妻・母」『一葉という現象——明治と樋口一葉』双文社出版、1998年10月。
- 13 前掲註10、21頁。
- 14 前掲註12、110頁。
- 15 前掲註7は、「《上》と《下》の構成を統合的にとらえ、二つの物語を添わせることによって生まれる物語効果や、主題の対比効果という側面から解釈しようとする論が強い」と、「十三夜」研究の近年の傾向をまとめている(289頁)。
- 16 前掲註6は、戦前戦後から当時に至るまで「抒情的な名作として評価が定まっているかの観がある」ことを指摘しつつ、「抒情性」の内実が真に問われ」ることを「十三夜」研究の課題とした(315-6頁)。これを含む1990年代以降の研究の多くは、「十三夜」が同時代のイデオロギー、特に手と手を携えた家父長制と資本制(上野千鶴子『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』(岩波書店、1990年10月)及び『近代家族の成立と終焉』(岩波書店、1994年3月))を反映しつつ相対化していること、すなわち「十三夜」の批判性を明らかにした。
- 17 「月」の小説としての「十三夜」評価は、前掲註6においてまとめられ、かつその問題点を指摘されている。
- 18 女性を再生産労働へと囲い込む明治20年代のイデオロギー的圧力と一葉文学の関係については、小森陽一「囚われた言葉／さまよい出す言葉——一葉における「女」の制度と<sup>ラング</sup><sup>ディスコース</sup>言説」(「文学」1986年8月)に詳しい。
- 19 小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』日本放送出版協会、1998年9月、46-7頁。
- 20 前掲註6、323頁。前掲註16上野『家父長制と資本制』を参照している。
- 21 斎藤と原田それぞれの社会的位置付けは、前掲註6、井上理恵「無限の闇——『十三夜』(新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』学藝書林、1994年6月)をはじめとする多くの先行論で詳細に述べられている。
- 22 対話におけるレトリックに関しては、前掲註5から多くの示唆を受けた。
- 23 本稿と同じく対話におけるずれに着目する前掲註11は、「お関の父親の《愛》の言葉は、親子の情愛を前面に出す。しかし(中略)実際にはそれが擦れに擦れを重ねて行くだけであり、お関は逆に絶望を深めるだけになった」と《上》の分析を結論づけている(79頁)。なお、「十三夜」という表題と舞台設定を、立身出世の物語に収斂させられる親子の情愛という観点から説明することも可能だ。「旧暦の十三夜」は、文明開化の気運の中で一旦は廃れた、しかし日清戦争後次第に復活しつつあった伝統的風俗としての月見が行われる、特別な時空間であった(前

掲註 5)。前掲註 4 が《上》の「月」を「一家団欒のきっかけともなる習俗の月」と呼んだように (249 頁)、それは血縁共同体としての家族の親密さを喚起する。そのような親密さにおいてこそ、お関の「此身一つ」への抑圧は強まるのである。

- <sup>24</sup> お関の戦略性を見る論は多い。例えば前掲註 5、谷川恵一「アナザー・ナイト——一葉「十三夜」」(『言葉のゆくえ——明治二〇年代の文学』平凡社、1993 年 1 月)、笹尾佳代『「十三夜」論——コミュニケーションの不可能性』(樋口一葉研究会編『論集樋口一葉Ⅳ』おうふう、2006 年 11 月) 等。
- <sup>25</sup> 笹尾佳代「ラジオドラマ「十三夜」のレトリック」(『結ばれる一葉——メディアと作家イメージ』双文社出版、2012 年 2 月) は、1929 (昭和 4) 年に放送されたラジオドラマ「十三夜」が、この「父親」の言葉に比重を置くことによって、明治天皇の顕彰と家制度の補強という時代の要請に応えたことを論じている。
- <sup>26</sup> 前掲註 6 及び 8。
- <sup>27</sup> 峯村至津子「くもらぬ月——一葉「十三夜」の或る表現をめぐる」『国語國文』2003 年 3 月。
- <sup>28</sup> 前掲註 18。
- <sup>29</sup> 前掲註 8 は、「父親」の言葉に則って母性を実体として捉えているように思われる。これに対し西莊保『「十三夜」論——先行する「嫁した女の不幸」の話と比較して』(『日本文学』1996 年 2 月) は、母性に「二面性」或は「二重性」を見る点で本稿の議論に近いと言えるだろう。
- <sup>30</sup> 前掲註 6 には、「いったんは阿関との未来に近代家族的な幻想を抱いた勇は、彼女の懐妊を目の当たりにして、阿関には「母親の教育力」(光田) がないことに気づき、すくなくとも動揺を来たし、対幻想や近代家族幻想を支えるものが自らの手中にはないことに気づいた」と、「勇」変貌の理由がまとめられている (327-8 頁)。なお、引かれているのは光田京子「近代的母性観の受容と変形——『教育する母親』から『良妻賢母』へ」(『母性を問う——歴史的変遷 (下)』人文書院、1985 年 11 月)。
- <sup>31</sup> 前掲註 6、328 頁。
- <sup>32</sup> 前掲註 18。
- <sup>33</sup> 但しここには、お関の「教育」観と勇のその間にあるずれを読み取ることもできる。このずれは、お関と勇の不仲の原因として、前掲註 7 や狩野啓子「関係性の病い——「十三夜」の照らし出す近代」(『日本文学』1996 年 11 月) において詳細に検討されている。
- <sup>34</sup> 前掲註 21 は、これを「惨めなシンプル・レイプの日々」と呼んだ (158 頁)。
- <sup>35</sup> 前掲註 8、48 頁。
- <sup>36</sup> 前掲註 24 笹尾も、「「原田の妻」、「太郎の母」であることが「斎藤家」の家族の一員としての〈労働力〉であることを意識した時、お関はそれを受け入れたのである」、「「今宵」もまた、「斎藤家」の〈資本〉の一部に組み込まれていたことによって、お関の離縁は妨げられたのである」と、お関の「翻意」をめぐる本稿に近い解釈を提示している (73 頁)。
- <sup>37</sup> お関の身体の流通への注目は、前掲註 24 笹尾に加え、前掲註 5 及び 6 にも見られる。

- <sup>38</sup> 前掲註 24 笹尾、引用は 73 頁。
- <sup>39</sup> 菅聡子『『十三夜』——心の闇』『国文学 解釈と鑑賞』1995 年 6 月。
- <sup>40</sup> 前掲註 24 笹尾、引用は 66 頁。
- <sup>41</sup> 前掲註 24 笹尾、引用は表題。
- <sup>42</sup> 前掲註 6、332、336 頁。
- <sup>43</sup> 「阿関の一家と録之助の一家」が「相似形で配置」されていることは、前掲註 21 によっても指摘されている（169 頁）。
- <sup>44</sup> 前掲註 7 も、「十三夜」にジェンダーの対比と反転可能性を見ている（296 頁）。
- <sup>45</sup> 前掲註 5 及び 6。
- <sup>46</sup> 前掲註 5 によれば、録之助は人力車夫の中でも底辺の「もうろう」車夫に属する。
- <sup>47</sup> ゆえに「家族から排除された阿関」、「家族」から排除された者たちが出会えるほとんど唯一の空間」（334 頁）という前掲註 6 の表現は、正確ではないだろう。
- <sup>48</sup> 1895（明治 28）年前後、「もうろう」（「まうらう」、「朦朧車夫」とも）の悪行、とりわけ「婦女子」への暴行が新聞で取沙汰されていた（前掲註 24 谷川、59-60 頁）。
- <sup>49</sup> 「明治二十年代末という時代をあげての「母の時間」への包囲網のなかで、一葉は「女の時間」への一瞬の跳躍を試みたといえよう」（337 頁）と、「女の時間」を「母の時間」に対置する前掲註 6 とは、本稿は趣意を異にする。
- <sup>50</sup> 例えば「昔しの身でな」いことを音信不通の弁解にするお関の言葉や、「お恥かしい身」と自己を卑下する録之助の言葉に、「家」と「市場」の論理、身分に分裂し疎外された身体としての「身」が見て取れる。
- <sup>51</sup> 前掲註 39 は、「十三夜」が顕在化させていくものを「言葉の無力」としている（85 頁）。
- <sup>52</sup> 前掲註 24 笹尾、78 頁。
- <sup>53</sup> 「十三夜」の冒頭から、「人」は「家」と「市場」の論理を内面化し、身分を絶対視する存在を指す言葉であった。

※本稿は、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻の 2013 年度夏学期の授業「言語態分析演習Ⅲ」（小森陽一先生）において行った口頭発表をもとに、大幅な加筆・修正を加えたものである。また本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

